



Detlev Schauwecker 教授近影

## デトレフ・シャウヴェッカー氏を送る

八 亀 徳 也

この度シャウヴェッカー氏が定年退職により、30年間勤められた関大を去られることになった。我々がキャンパスのうちそとで彼と一緒に送ってきたこの年月を思い返すと、やはり一抹の淋しさを禁じ得ない。また一人の同僚が去って行くのだ。

実は、氏が本学に就任される前の京都外大時代から知っていて、研究室が斜め向かい同士で、今までずっと互いにduzenしてきた私にとって、彼をこの文で先生と呼ぶのは余所余所しいし、かと言ってデトレフと呼び捨てにしたり、君（くん）づけにするのにも何か違和感がある。そこで便宜上、シャウヴェッカー氏で統一することを先ずご了解頂きたい。

シャウヴェッカー氏は1941年にベルリンに生まれ、ボーフムおよびベンスハイム（ヘッセン州）のギムナジウムで学ばれたあと、ミュンヘン、ベルリン、ハンブルク、後に博士号を取得されるマールブルクの各大学で日本学や演劇学を研究され、1974年に来日された。本学文学部独文学科には77年4月に、故和田賀一郎教授の推薦で助教授として来られたが、当時は、大学のいわゆる教養課程ではなく、専門の学科に未だネイティヴ・スピーカーが少ない時代だった。81年に教授に昇任。2000年に外国語教育研究機構ができると、他の3人の同僚とともにそちらに移籍され、引き続き研究と教育に没頭してこられた。

日本学者としての氏の業績の中心はなんと言っても、近松門左衛門の研究とその作品のドイツ語訳の集積であろう。上述のマールブルク大学に提出された博士論文の題目は「近松門左衛門研究、二つの世話物人形浄瑠璃の文体と構造」と称するもので、これには世話物二曲の全ドイツ語訳と近松演劇論『難波土産』の独訳が付されていて、1975年、『Marburger Studien zur Afrika- und Asienkunde』のシリーズB、アジア篇の第3巻として刊行された。その後は精力的に、『心中天の網島』、『曾根崎心中』、『槍の権三』、『堀川波鼓』、『女殺油地獄』の翻訳と解説を、

OAG、関大独逸文学会あるいはボーフム大学の紀要に次々と発表された。来日後、16世紀以来の日欧交流史研究や1930年代、40年代の日独相互の文化政策の比較研究に重点を置いてこられた氏の成果は非常に多岐に亘っており、一々枚挙する暇がないが、敢えて挙げれば、17、18世紀にイエズス会の創作した日本劇、シーボルトを始めとする西洋人の描写した日本像、ドイツ演劇における日本像等に関する研究であろう。また、ご父君が医者であられたことによる影響からか（これはあくまでも私の推察でしかないが）、近世日本医学史における東西の接触に関する論文を何篇も執筆しておられる。

さて話題は変わるが、シャウヴェッカー氏が関大に在職しておられたこの30年間、氏が常に焦らず慌てず、専ら自分の時計に従い、自分の気に合った服装をし、時には電車と徒歩で、時にはメルツェーデスやジープで通勤し、またある時には通勤途中や授業前に町の銭湯で一風呂浴びるなど、悠然と己の生活スタイルを貫き通しておられるのを見て羨ましく思ったものである。教育面では学生に自主的に研究する機会を与え、授業中は気楽な雰囲気の中で受講できるよう工夫をしておられたようである。が、氏の悠揚迫らぬ人柄が、学生に自由に発言し議論する気持ちを起こさせ、教室の中で大いにリラックスさせ、これがためにいつも学生に好かれておられたのではないかと勝手に想像している。

私自身、昔よくドイツ語で論文を書いていた頃、原稿の手直しをしてもらうのに必ずと言ってよいほど氏のお世話になっていた。時には、締め切りが迫っていたために、当時彼が住んでいた京都市左京区一乗寺まで押しかけて行ったこともある。そういう場合でも彼はイヤな顔一つ見せず相手をしてくれたし、夜になってから二人で、京都市内で彼の知人のフランス人が経営するレストランへ食事に出かけたこともあった。

今、シャウヴェッカー氏は、京都の更に奥の日吉町に居を移して住まわれ、また酒宴に同席しても盃を口にされる姿を見なくなるなど、私から少し遠い存在になってしまわれた。今回の退職で一層縁遠くなられることも覚悟せねばならないかも知れないが、これからは末永く健康でいて、更なる研究成果を発表されることを願って止まない。デトレフ、長い間お疲れさん、ありがとう、そしてごきげんよう。